

## 式 辞

本日、公立大学法人山陽小野田市立山口東京理科大学工学部各学科、薬学部薬学科へ入学された皆さん、大学院工学研究科修士課程、博士後期課程へ進学された皆さん、おめでとうございます。山口東京理科大学を代表して心からお祝いを申し上げます。

また、今日まで、すべての面で皆さんを支えてこられました御家族の皆様及び関係者の皆様に、心からお祝いのご挨拶を申し上げます。

さらに、本日ご多忙の中、ご列席を賜りました、御来賓の皆様には、本学を代表致しまして篤く御礼申し上げます。

山口東京理科大学は一昨年四月一日より公立大学法人下の大学として新たな一步を踏み出し、皆様のおかげをもちまして、丸二年を無事終えることができました。そしてさらに、この四月一日より薬学部を設置することをいたしました。本日は入学式に先立ちまして、薬学部開学記念式を滞りなく行わせていただきました。開学記念式には、多数の御来賓の方々にご参列いただき、衆議院議員河村建夫様、参議院議員林芳正様、山口県知事村岡嗣政様には、ご祝辞を賜りました。この上は、この地に永く望まれてきた、薬学の知識を有する人材を育て、地域の健康を担う、薬学の知の拠点をここに築き上げて参ります。

こうして、工学部と薬学部よりなる大学となりまして、数年後には学生数も、現在の倍近くになります。この地に集う若い力を源泉に、地域の活性化、社会の繁栄を目指して参りたいと思います。学内においては薬学と工学のシナジーにより、教育や研究に一段の発展を期待し、社会

への貢献、新たな産業の創出や優れた人材の育成を行っていく所存です。ここで学ぶ学生諸君にはぜひ、学部相互の融合に努め、「工学的センスを有する薬剤師、薬学者」、「生命や健康に関心の高いエンジニアや研究者」となって次の世界を担っていただきたいと願っております。

およそ人が生きていくうえで大事なものは3つの豊かさであります。「心」と「体」と「富」の豊かさです。工学部の使命は、産業を興し、富をもたらし、人を裕福にすることです。他方、薬学部は、人の健康寿命を延ばし、安らかな生活を生み出さねば成りません。そして、富と健康こそが、心の豊かさを支えるものです。私たちは、工学と薬学、ふたつの実学の力で社会に「心の豊かさ」をもたらさなければなりません。

本学がここに至るまでにはこの大学の発展を願う多くの方のまさに献身的なご支援がありましたことを忘れてはなりません。平成二十六年十二月に、学校法人東京理科大学と山陽小野田市が公立大学法人化に合意、翌年夏、公立大学法人設立の申請を行い、十二月に認可を頂き、平成二十八年四月に公立大学に移行いたしました。そして、昨年三月に薬学部設置申請を行い、八月に林文部科学大臣様より認可を頂きました。

今、薬学部一期生の皆様をお迎えするにあたり、建物の一部の準備が遅れたことにつきましては市や大学を代表いたしましたし、心よりお詫びいたします。しかし、皆様の教育には全く支障がないよう万全を期しておりますので、ご安心ください。薬学部の五階建てのふたつの建屋ですが、大学のある地元の力を集めて建設した建物です。国内トップシエアを誇る地元の工場で加工した鉄筋棒鋼を芯に入れ、地元の山から産出した原料を、地元の工場で加工したセメントを材料としました。これを地元の建設企業が力を合わせて、造り上げたのです。名だたる企業に比べ

ますと、資金力も人を日本中から集めてくる力もありませんし、このところのオリンピック需要などの影響を受けて、建設資材の購入もままありませんでした。そのような無理の利かない中、本当に地元の応援の聲が支えとなって、地元力を結集してできあがったのが本学の校舎です。市から派遣され、現場で指揮をとられた方は定年後に東日本大震災の被災地での支援を終えられたのち、ここに戻って大学のために、残った力を絞り出すようにして休みも取らず頑張った方です。私は毎日、建物の伸びていく様子を新しい大学への思いとともに写真に収めながら、注視し続けてきました。今、このふたつの建物には、関係する方々の魂が宿っているとしか言いようのない神々しさを感じます。本学のこの、皆様の思いの詰まった建物には、末永く、教育や研究の場となり、存分に活躍してもらおう所存です。どうか、出だしの遅れなど一笑に付す寛大なお心にて、大きな期待をこの地に生まれた薬学部明日にかけていただきたくお願い申し上げます。

さて、あらためまして本学の歴史をたどれば、百三十七年前、「理学の普及をもって国運発展の基礎とする」を建学の精神として一八八一年に設立されました、東京理科大学の前身、東京物理講習所に起源を發します。

その精神を受け継ぎ、一九八七年に本学の前身であります東京理科大学山口短期大学が開設され、一九九五年に四年制大学へと転換、その後、設立母体が変わり、公立化した山口東京理科大学として現在に至っております。この間、二十三年、確かな基礎技術力を身に着けた、地域産業界で活躍する人材を育てることを目標に努めてまいりました。四年制大学となりましてからの卒業生は二千人に及び、地元産業界を中心に活躍

しております。そもそも東京理科大学の教育の真髄は科学技術や工学の現場でしっかり活躍できるだけの力を会得したもののだけが卒業できる「実力主義」にあります。これこそが、理科大を卒業した技術者や薬学・工学関係者、理系人材が社会の様々な場所で高い評価を頂いているゆえんであります。工学と薬学、ふたつの学部が備わった今、本学も、理科大のこの崇高な方針を継承して今後も社会の諸課題の解決に向け、十分な実力を発揮できる人材を育てていくことに変わりはありません。

同時に、公立大学であります本学は、研究と教育の両面で地域力を発揮して、街にあらたな生活基盤の息吹を呼びこみ、人が集まってくる魅力のある場にしなければなりません。そして、人口減少や少子化の問題に対しては、大学の技術力と知識科学で、これに負けない「高い生産性」を生み出し、人々の生活水準の向上を図ってまいります。

さてこうした時代や社会の変化と共に変遷してまいりました本学ですが、これから新たな勉学や研究の道を志す皆さんに、二つのことを申し上げたいと思います。

ひとつは、『皆さんに与えられた、かけがえのない大学での貴重な時間を大切にしてください』ということです。

大学という最高学府に通う日々は、心身共に解放された、気力あふれ、人生で一番自由な時期です。このような大学で学べる機会を得られたということとは、皆さんは大変恵まれているということなのです。十八歳人口の半数が大学への進学を選んでいる日本の社会でも、多くの人達がいろいろな事情で大学進学を断念している現実があります。

さらに世界に目を向ければ、七十数億の人類のごくわずかな人しか大学で学ぶ機会を与えられていないのです。

その機会を得た皆さんが自身の将来のために大学生活を役立たせないでどういたしましょう。

下関で生まれ、長く郷土の新聞記者、編集者をされたのち作家になられ、「漂泊者のアリア」で第一〇四回直木賞を受賞された古川薫さんの講演を下関でお聴きしたことがあります。地元新聞社の七〇周年記念公演でしたが、時の流れを砂時計に例え、上部の未来から下部の過去に砂が落ちるガラスのくびれが現在だとして、さらに、一日四回潮流の向きが変わる関門海峡こそ巨大な水時計のくびれであると表現されました。確かにこの山口県の西端では瀬戸内海と日本海をつなぐ海峡で様々な歴史が生まれたといえるのです。そして、時間はそれぞれの人の中にあり、砂時計のくびれの瞬間を生きているに過ぎず、ご自身も若い時は、時間は無限にあると思ひ込んでいたが、実は砂時計の砂のごとく有限であるからこそ、それを大事にしようと呼びかけられていました。皆さんもどうか、この若い今を大切にしてください。

今年、この山口県は明治維新百五十年の節目で、様々な催しが計画されております。かつて、この地から英国に留学したいずれも二十代の五人の若者がいました。いわゆる長州ファイブといわれる後世の偉人たちの若かりし姿で、その後の明治新体制の中核を担った人たちです。このうち、伊藤博文は、事情によりわずか半年の英国滞在でしたが、防府のご出身で元日立金属社長の松野浩二様から頂いた御著書「その後の長州五傑」によれば、伊藤の英文の手紙は達筆で見事であり、後年、米国で行った英語の演説は堂々たるものであったそうです。ことほど左様に、

伊藤博文公は、短期間に、必要に迫られて、異国の言葉を集中して学ばれたのでしよう。いかにチャンスをものにして学ぶかが、その後のその人の人生を左右しうるかということでもあります。

ところで、皆さんはアサギマダラという蝶を知っていますか。この蝶は日本列島各地に見られる旅する蝶です。アサギマダラほど、優雅に飛ぶ蝶はいません。しかも、そのか細い体軀からは想像もつかない力を秘めています。日本列島を縦断して台湾とか南方に飛んでいく旅をする蝶なのです。この街の瀬戸内海側に大学のシンボルともいべき竜王山という小高い山があります。その中腹のお花畑に秋、わずか十日ばかりですが、沢山のアサギマダラが飛来します。この地に立ち寄って蜜を吸い、しばし休んでからまた南を目指して飛んでいきます。実はこの蝶、本学のキャンパスに学生たちが植えたヒヨドリ花にも来るようになりました。

私には、この蝶が学生達に重なってなりません。人生の一番、多感な時期にこの地を訪れ、学び、そして飛び立っていく。そして、またいつかこの地に戻ってきてくれる。気持ちよく、立ち寄っていただけるような場所にしたいと私も大勢の教職員も願い、大学に心の花を育てています。人生の一時期にすぎませんが、この学び舎にとどまる間に、自らの夢を実現するための力を磨くべく、切磋琢磨してください。皆さんの大切なこの時期を有意義にできるよう、貴重な時間を大切に使えるよう、私達教職員もこの大学を素晴らしい花畑に仕立てるべく、日々努力致します。

さて、本日、申し上げたいもう一つのこととは、こうした選ばれた皆さんに与えられた貴重な時間に、『自ら学ぶことを身につけなさい』という

ことです。何かを学ぶことも大事ですが、『学ぶすべを身に着けてほしい、学び方を学んでほしい』と思います。

私は必ず、大学生になられた皆さんに、デンマークの哲学者キルケゴールの、老人と渡り鳥の話をしませう。皆さんの中にはご存知の方もいらっしゃると思いますが、大切な内容を含んでおりますので、本日も新入生の皆さんにお話し致します。

北欧の湖に、毎年、季節になると野鴨たちが渡ってきました。近くに住む老人がはるばる渡ってきた鴨をいたわって、毎日餌を与えるようになりませう。野鴨は餌がいつもあり、親切な老人のいるこの湖がすっかり気に入りました。

そもそも野生の渡り鳥は同じ場所には住み着かないもので、季節が過ぎると次の土地に向けて遠くに飛び立つ習性をもっています。ところが、この湖の野鴨たちはいつも餌が与えられ、何一つ不自由しないこの土地から飛んでいく必要はないように思うようになりました。そして、野鴨たちはこの湖に住み着くようになりませう。

野鴨たちはいつしか苦労した長旅の記憶を忘れていきました。そんな時、いつも餌を運んでくれ、彼らを、こよなく愛してくれた親切な老人が亡くなりました。その日から野鴨たちは食べる餌に困るようになりませう。餌に困って他の土地に飛び立とうとするのですが、どうしたことか飛び立つことができなくなっていました。気が付くと、知らないうちに肥ってしまい、かつて遠くまで飛べたはずの力が全く失われていました。やがて湖に嵐がやってきて周りの山々から激流が流れ込んできました。そして、その激流に押し流されて肥った鴨たちは死んでしまいました。

この逸話の教訓の一つの見方は、容易に餌を与えられるよりも、餌自体を採る方法を身に着けることのほうがはるかに重要だということです。皆さんは、いずれは大学や大学院を卒業して社会に出ていくでしょう。社会の要求は日進月歩であり、技術は多岐に渡ります。大学や大学院で学ぶ期間の十倍もの時間、この先、社会で仕事をするためには、新しい知識を学び続けなければなりません。いかに優れた最先端の研究や教育を行っても、社会の進歩はさらにこれを上回り、大学や大学院の教育だけで完璧に世の中に役立つ科学技術者を育成することは不可能です。大学で身に着けた知識は時間とともに陳腐化し、また、様々な仕事には固有の技術や知識を身に着ける必要があります。社会に出た科学技術者は大学や大学院で得た専門知識をもとにして、自らの手でそれを拡張していく、すなわち学び続けなければなりません。すなわち、大学時代に学ぶべきことは、すべての基礎となる知識とそれを一生、拡大するために必要な学び続ける方法です。

ぜひ、学ぶ力を身に着けてください。人生は学ぶことの連続です。人類が今日の文明を築き上げることができたのは、たゆまぬ研鑽の日々の積み重ねの歴史の結果に他なりません。人はひとりひとり、生きていく場所で一生、いろいろな形で学ぶことを続けなければ進歩はないのです。

私が本日ここに申し上げたふたつのことをもう一度まとめますと、『皆さんに与えられた大学での貴重な時間を大切にしてください』ということと、そこで『学ぶべきは生涯にわたり学び続けるためのすべを身につけること』です。

さて、皆さんがアサギマダラのように人生の途中で舞い降りてきてく



ださったこの山陽小野田市は、「しあわせ」が手に届くところにある街です。若い皆さんの今は、「みらい」が手に届くところにある年頃です。そして、皆さんが入学した山口東京理科大学は、「きぼう」が手に届くところにある大学です。

どうか、健康に注意されて、今日の初心を忘れずに、しっかりした目標を立てられ、それを目指して存分に学んでください。皆さんが、有意義な学生生活を過ごされますことを願って、入学式の式辞といたします。

平成三十年四月十日

公立大学法人 山陽小野田市立 山口東京理科大学長 森 田 廣